



TITLE:

京大広報 No. 405

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 405. 京大広報 1991, 405: 45-52

ISSUE DATE:

1991-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209268>

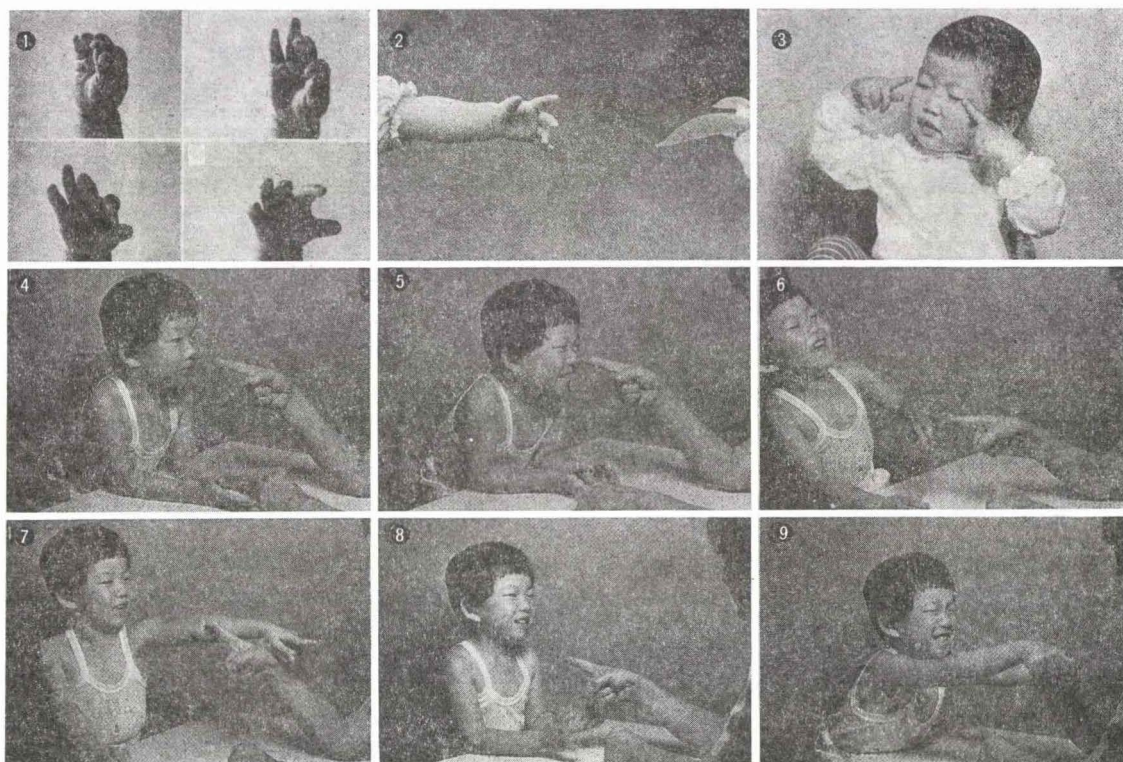
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 405

京都大学広報委員会



発達の謎を秘めて

①“ひとしりそめしほほえみ”が発生する頃の母指のひらきかた。②“われしりそめしことば”が発生する頃の人さし指の指しかた。③自我の拡大過程での対の指さし。④～⑨“ことわりしりそめしかきことば”が発生する頃の幼い自己の指さし（いたずらっこの話をして、④「それは、この人」と指すと、不意をつかれて、⑤思わず鼻先を近づけ、⑥やがてそこから離れつつ相手の指さしをおさえ、⑦「ちがう、この人」と相手を指し返す。⑧もう一度要点を言って指すと、⑨今度は相手の指を相手の方へ向けてしまう。転倒させる力を秘めた指さし。）〔田中昌人・田中杉恵・有田知行（写真）：『子どもの発達と診断』①，②，⑤より〕

—関連記事本文47ページ—

目 次

<大学の動き>

- 西島総長，スイス連邦訪問……………46
- ルイ・バストゥール大学との学術交流……………46
- 京都大学市民講座「ことば」講演要旨（その4）…47

<部局の動き>

- 教養部図書館の入退館方法……………48
- 計 報……………48

<紹介>

- 経済研究所……………49

<随想>

- 思いでの中の野間 宏さん
名誉教授 寺本 英……………50

<資料>

- 平成2年度教育実習実施状況……………51

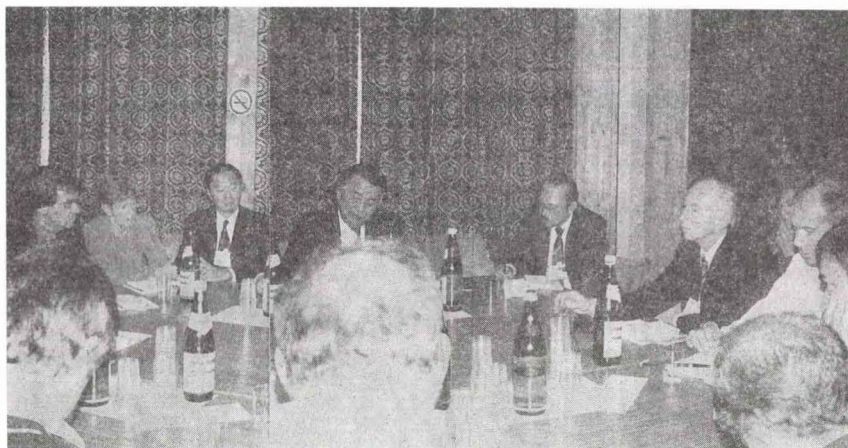
＜大学の動き＞

西島総長、スイス連邦訪問

西島安則総長は、2月1日から、スイス連邦のダボスで開かれた国際会議（World Economic Forum Annual Meeting 1991）に出席し、併せ

てスイス連邦の高等教育・研究機関の実情を調査するため同国を訪れ、2月10日帰国した。

ダボスでの会議では“Academic Council Meeting”及び“Textile Trade and Industry Forum”に出席し、それぞれ講演を行い、討論会の議長をつとめるなどして、各国代表者と意見交換を行った。



「世界有数の大学・研究所での教育・研究の現状とそれに対する社会の期待との間にある隔たり」について、各分野からの代表者の意見をあつめてまとめを作成している西島総長（2月5日のセッションでの1コマ）

ルイ・パストゥール大学（ストラ ズブル第一大学）との学術交流

本学とフランス共和国のルイ・パストゥール大学（ストラズブル第一大学）の「学術交流に関する一般的覚書」が、平成3年1月23日に交換された。

これは平成元年2月、ルイ・パストゥール大学ロストツリア（Gilbert LAUSTRIAT）学長が本学を訪問した際に、学術交流について話し合いがあり、同年3月に同学長から書簡により提案があったものである。

本学ではこれについて検討を進めると同時に、国際交流委員会の答申（関連記事『京大広報』No. 363）に沿って同大学と協議を続け、平成2年1月「覚書」を交換することが了承されたものである。

この度、ロストツリア学長が本学を訪問し、総長室において、ルイ・パストゥール大学との「覚書」が調印された。

ルイ・パストゥール大学の概要は、次のとおりである。

創立：1538年

教員・研究員数：約2,600人

学生数：約16,000人（大学院生を含む）

研究・教育分野：

生命科学（医学、薬学、歯学）

自然科学（数学、コンピュータ、物理学、化学、生物学、地質学、地球物理学、天文学）

人文社会科学（経済学、経営学、地理学、心理学）

—ルイ・パストゥール大学からの資料より—



京都大学市民講座「ことば」

講演要旨（その4）

「ことば」の習得と子どもの成長

——話しことばから書きことばへ——

教育学部教授 田中 昌人

進化のどの段階から、霊長類の中で人間だけが産声をあげるようになったのだろうか。誕生に始まる話しことばへの道は、まず乳児期前半の発達の第1段階に新生児微笑や鼻母音を、第2段階に普遍的なほほえみかえしや喉子音を可能にする。この後、発生してくる生後第1の新しい発達の力は、母指をひらき、他者を認めてだまっはほえみかけたり、発声をするさいには口唇閉塞音などをともなってくる。「ひとしりそめしほほえみ」の発生である。そして発達の第3段階に選択的笑顔や音節様発声を豊富にしていく。これ以後は、生後第2の発達の階層への新しい操作を獲得して、乳児期後半への飛躍的移行をなしとげる。

乳児期後半になって内に「我」をもってくると、発声量が他の霊長類では減少してくるのとは逆に増大し、ここでの発達の第1段階に喃語を、第2段階に志向の音声が可能にする。この後、発生してくる生後第2の新しい発達の力は、自分の名前を呼ばれるとわかり、自らも初語を発し、ことばをとまなう身振りをする。「われしりそめしことば」の発生である。そして、第3段階に定位の指さしや定位の音声を盛んにしていく。これ以後は、生後第3の発達の階層への新しい操作を獲得して、幼児期への飛躍的移行をなしとげる。

乳児期に2度までも新しい発達の力を発生させ、次の発達の階層への飛躍的移行をなしとげて、内に「自我」をもつまでになってきた幼児は、いよいよ生後第3の発達の階層で母国語による話しことばを増大させ始める。ここでの発達の第1段階には、ほしいものを一語文でいい、さらに自らの名前を入れて要求をするなど自我を拡大させていく。やがて「オオキイ」と「チイサイ」、「スキ」と「キライ」など発達的には2次元のことばを使用し、自らの苗字と名前を結合させ、男女の区別ができ、年齢も2歳でなく3歳になったことをいうなどして自我の充実を進める。このとき自らを

「ワタン」とか「ボク」というようになる。充実した自我は発達の第2の段階になると、ケンケンをしたり、左右の手を交互に開閉したり、4数を復唱するなどというように、その中に2種類の2次元を一つにまとめた制御を行い、自制心を形成していく。その結果、相手を「アンタ」とか「オマエ」などと把握する。この間、描くことは、自我の拡大過程に円錯画が、自我の充実過程に「顔」の時代が、自制心の形成過程に「人」の時代が対応することも注目される。

初期のかきことばは、以上を発達的な前提として獲得されていく。幼児期の発達の第2から第3の段階へ移行していく幼児期後期になると、空間的には「マンナカ」、時間的には「イマ」、価値的には中間項にあたることばを知って、発達的には3次元の世界を形成していく。話しことばには文脈が、描くものには初期のつづき絵や画面の3分割が、さらには図式や記号などがそなわって、ルールを把える。生後第3の新しい発達の力は、発達の3次元形成の豊かさの上に、例えば積木あそびでも色や向きを転倒させても「オナジ」ということが理由をとまなわかってくるなどという力として発生してくる。さらに「ジブンデスル！」というだけでなく、相手にも「ジブンデシタラ！」などというように自他の中に「ジブン」を見出し、役割による交代ができるようになる。このようにして幼い自己を発見すると、小さい時から変ってきたところが言え、1年生になったら「モット〜シタイ」と言うように、主観的にはあっても幼い自己形成視をするようになる。こうして文字の習得が始まる。他者を導き教えるようになり、その活動が自己を導き教えて、幼い自己形成視を啓培していく。この相互活動をもとに、相手と肩を組み、腕をとり、握手をしたくなる幼い自己の体験が相手に初期の手紙文（次ページ手紙文参照）などを送るようになる。文中には幼い自己の気持にはじまり、自己で接続し、自己に結ぶといった様式をもつ初期の“ことわりしりそめしかきことば”が発生している。

なお、読・書・算の文字を中心とした書きことばは、ここでの発達の第3段階へ進んで複文などを豊かにしていく。これ以後は、学童期なかばからにあたる生後第4の発達の階層への新しい操作を獲

得して飛躍的移行をなしとげていく。各種の表現手段の間に保存の概念が成立した対応がおこなわれ、人格の発達の基礎には「集団的自己」を啓培しつつ、ここで第2段階以後、生後第4の新しい発達の力をもとにした新しい交流の手段を獲得し、学力などの形成が進むことになる。

通常、人間は成人までに発達の自由を新たにしていって4つの発達の階層をもつ。そのそれぞれに3つの発達段階と次の発達の階層への飛躍的移行期がある。飛躍的移行を達成する新しい発達の力はその前の発達の階層における第2から第3の段階へ移行する間に発生するが、そのときにことばをふくむ新しい交流の手段をとまらう。それは、次の発達の階層への飛躍的移行を達成して、人格の発達の基礎における結合性を高めつつ発達を主導し、調整的機能をもつようになる。このように、ことばは人間の場合、重層的な発達連関と教育の人間関係において自らのものになっていく。それは、1990年・国際識字年の文化の日になんでいうならば、人間を人間にしていって最も人間的な営みとはたらきかけの中で人間的に習得されていくものであるといえよう。

(平成2年11月3日 講演)

<部局の動き>

教養部図書館の入退館方法

教養部図書館では、本年4月1日から新しい入退館システムの導入により、入退館方法及び閲覧方法が次のとおりかわります。

従来のカウンター・チェック方式を廃止し、附属図書館と同様に図書館利用証(IDカード)を入館チェック・ゲートに読み込ませ、開閉バーによって入退館を行う方式となります。従って、図書館の入館には必ず図書館利用証が必要です。

この方式により、閲覧は自由接架方式となり、冊数の制限もなく開架図書を自由に選択して閲覧室で読むことが可能になります。

その他、図書の館外貸出手続き、書庫内図書の取扱い及び2階閲覧室の利用については、従来どおり変更はありません。

なお、図書館利用についての詳細は、教養部図書館参考調査掛(内線6524)までお問合せください。(教養部)



初期の手紙文(外国にいるおとうさんへ)

おかあさんによる要約「オトウサン マタ ユウエンチニツレテイッテヨ。ヨウチャン(自分)モイクカラ。カンランシャコワイカラヤメテヨ。ヨウ(自分)モオカアサンノユウコトキイテイマス。ヨウコノオバアチャンノアシモ ナオッテキマシタヨ。ヨウコヨリ。ヨウチャンノオトウサンモゲンキデ。サヨウナラ。ヨウコヨリ。」

計 報

大地原 豊 名誉教授

本学名誉教授 大地原 豊先生は、2月8日逝去された。享年67。

先生は、昭和22年京都帝国大学文学部を卒業後、アメリカ、フランス及びインドに留学され、帰国後、関西大学講師を経て、昭和32年本学文学部助教授、同47年文学部教授に就任、梵語学梵文学講座を担当され、同61年停年により退官、京大大学名誉教授の称号を授与された。

先生の専門は広義のインド文学であり、中でもサンスクリット土着文法学の研究において優れた研究業績を残された。主な著書に『カーシカー・ヴリッティ』(Kāśikāvṛtti) 3巻 (Paris, 1960, 1962, 1967), 『公女マーラヴィカーとアグニミトラ王』(岩波文庫)等があり、絶筆となったインド史上例の少ない政治劇の翻訳『宰相ラクシャサの印章—古典サンスクリット陰謀劇—』(東海大学出版会)は3月刊行の予定である。

先生は、国際サンスクリット学会副会長、顧問を歴任され、また、コレージュ・ド・フランスにおける講義を始めとして、フランスを中心とする国際学術交流に大きな役割を果たされた。これら一連の研究活動、学術上の貢献に対し、昭和52年フランス政府から教育功労勲章(l'Ordre des Palmes académiques) シュヴァリエ章を授与され、平成2年にはフランス学士院客員会員に選ばれた。(『京大広報』No.401 参照)

ここに謹んで哀悼の意を表します。(文学部)

＜紹介＞

経済研究所

経済研究所は産業経済の理論的・実証的研究の重要性にかんがみ、1962年4月に創立された。まもなく創立30周年を迎えようとしている。創立以来、わが国の経済学界をリードする研究所として名声を博し、国際的にも高い評価を受けていると自負している。

具体的にどのような評価があるか簡単に述べてみよう。第1に、日本の経済学者が世界の一流学術誌にどれだけ貢献しているかということを調べた詳細な報告書が最近発表された。その報告書によると、京大（経済研究所）は東大、筑波大、阪大と共にトップ4グループの一員としてランクづけされていた。しかし、研究者1人あたりの貢献度に換算して評価すると断然トップである。小人数ながらの健闘が目立つのが本研究所の特色であるといえよう。第2に、アメリカ経済学界が数年前に世界の大学を学術誌への貢献度によって順位づけをしたことがある。それによると、日本の大学のトップは京大（経済研究所）であり、第2位は東大経済学部であった。残念なことに100校以上の世界の大学のうち、日本の大学で名が現われたのはわずか2校であり、しかもその2校も全体でみるとかなりの下位に甘んじていた。日本の経済学者がまだノーベル賞を誰も受賞していないことからもうかがえるように、日本の経済学者の貢献はまだ低いのが現状である。

上記の二つの例は、いわゆるレフェリー付きの学術誌に載った論文に基づいて評価されたものである。自然科学ではレフェリー付きの学術誌はいわばあたりまえであるが、人文科学や社会科学では質のコントロールが欠けているとはいえ、書籍、報告書、紀要、その他の手段で成果を発表する機会がある。従って、わが国ではレフェリー付きの学術誌のみが評価の基準ではないが、欧米に普遍的な評価基準によると、経済研究所はそこそこ頑張っているといえるのである。

本研究所の研究分野における特色を述べてみよう。第1は、創立期よりの伝統である数量分析の分野である。数量分析は大別して次の三つの分野に分けられる。その1は、数理経済学の手法を用

いて、経済諸変数間の相互依存関係や経済主体の行動様式を理論的に解明する分野である。伝統的な微積分やトポロジーを用いた方法に加えて、最近ではゲーム理論を用いた分析手法が脚光を浴びており、本研究所はこの分野で日本における中心の一つになりつつある。その2は、経済データの統計解析に際して有用な分析手法の開発に寄与する計量経済学の分野である。本研究所はこの分野でも世界的な貢献をしてきた。その3は、経済データを用いて現実の経済の動向を解明しようとする、いわゆる実証研究である。マクロでみた日本経済、ミクロでみた日本の企業、家計の行動を説明する論理を探究する分野である。以上三つの分野は相互に関連のあることはいうまでもない。他の分野の発展によって刺激を受けるし、お互いに影響を与えあってきたのである。本研究所のスタッフは緊密な研究体制を築くことによって、成果を挙げてきたといえる。

第2の特色は、世界経済論、資本主義経済論、社会主義経済論の分野である。特に本研究所は社会主義経済圏の経済分析に貢献してきた。現今社会主義国家は大変な激動期にあるといえるが、ソ連、東欧、中国の経済事情の把握に精力を注いできた。現地調査を含めた綿密な実証研究によって、それらの国の現状を的確に認識することに努めてきたのである。

研究分野以外の特色を簡単に述べてみると次のようになる。第1に、所員には、外国の大学（特にアメリカ）で教育を受けてそこで学位を取得した者が多い。これは日本の大学院教育の貧困さを物語っていることにもなるので、必ずしも自慢できることではない。さらに、外国の大学で教育、研究する者が多い。逆に外国からの来訪者も多い。まとめれば国際化が進んでいるといえよう。第2に、本研究所に在籍中に貴重な研究成果を挙げたから、他の研究機関に転出し、学界の重鎮になった者が多い。例えば、渡部経彦（故人）、建元正弘、鈴木興太郎、森口親司、小池和男の諸氏である。特に目立つのが、数が多過ぎて名を列举しないが、本研究所に助手として数年間在籍後、他の大学に転出して秀れた研究成果を挙げている研究者が非常に多いことである。これらの事実は、本研究所が大学間の人事交流に貢献してきたと評価されるべきであろう。（経済研究所）

<資 料>

平成 2 年度教育実習実施状況

本年度の教育実習は41都道府県の各国公私立高等学校160校，中学校30校，養護学校6校，盲学校1校の協力を得て実施した。

1. 学部別の履修状況

区 分	学 部	文学部	教育学部	法学部	経済学部	理学部	医学部	薬学部	工学部	農学部	計
参 加 申 込 者		人 [1] 89(1)	人 [3] 30(1)	人 18	人 7	人 68(1)	人 0	人 12	人 47(3)	人 44(3)	人 [4] 315(9)
取 り 止 め た 者		10	3	0	1	5	0	1	6	9	35
実 習 終 了 者		人 [1] 79(1)	人 [3] 27(1)	18	6	63(1)	0	11	41(3)	35(3)	人 [4] 280(9)

(注) 右肩上の [] は聴講生数，() は大学院生数でいずれも内数。

2. 教科別，校種別実施状況

区 分	学 部	文学部	教育学部	法学部	経済学部	理学部	医学部	薬学部	工学部	農学部	計
国 語	中 学 校	人 1	人	人	人	人	人	人	人	人	人 1
	高 等 学 校	17	5								22
英 語	中 学 校		4	2							6
	高 等 学 校	21	6		1						28
社 会	中 学 校	5		3	1						9
	高 等 学 校	32	2	13	3					1	51
	盲 学 校	1									1
理 科	中 学 校					1		1		5	7
	高 等 学 校	2				31		10	11	27	81
数 学	中 学 校		1			1			4	1	7
	高 等 学 校		4		1	29			26	1	61
計	中 学 校	6	5	5	1	2		1	4	6	30
	高 等 学 校	72	17	13	5	60		10	37	29	243
	盲 学 校	1									1
養 護 学 校			5			1					6
合 計		79	27	18	6	63		11	41	35	280

3. 実習校の配当方式

区 分 学 部		文学部	教育学部	法学部	経済学部	理学部	医学部	薬学部	工学部	農学部	計
京 都 市 配 当	市立中・高校	3人	人	1人	人	人	人	1人	1人	2人	8人
	養護学校		2			1					3
	取り止めた者		1					1			2
	実習終了者	3	1	1		1		0	1	2	9
出 身 校	出身中・高校	86	28	17	7	67		11	46	42	304
	取り止めた者	10	2	0	1	5		0	6	9	33
	実習終了者	76	26	17	6	62		11	40	33	271

(教職教育委員会)

訂正

京大広報 No. 403 (27ページ)「平成2年度停年退職教官」の記事中、農学部川島良治教授の出身校「京都農林専門学校」は「京大・農」の誤りにつき訂正します。

